

成果報告書

2022年 04月 25日

公益財団法人乃村文化財団 理事長 渡辺 勝 様

貴財団の助成金事業についてご報告します。

該当する助成の種類にチェック	✓	研究助成	教育普及活動助成
フリガナ			
研究室名 学会・博物館名	北海道大学 CoSTEP ソーシャルデザイン実習		
フリガナ	バク ヒョンジョン	職名	
代表者名	朴 炫貞	特任講師	
フリガナ	バク ヒョンジョン	職名	
担当者名	朴 炫貞	特任講師	
所在地	〒060-0817 北海道札幌市北区北17条西8丁目 北海道大学 高等教育推進機構 N163A室		
対象となる研究および教育普及活動の概要	<p>【テーマ】アノオンシツのディスプレイを通じた新たな科学技術コミュニケーションの場づくり 北海道大学 札幌キャンパスにある古い温室を生かしたアートプロジェクト「アノオンシツ」をフィールドに、北海道在住に作家と自然をテーマにして共同制作で作品を制作し、展示を実施する。アノオンシツ周辺の自然から、研究林、北海道の自然を対象にしつつ、自然物を材料とした作品を共同で制作して展示を行うことで、その実践をアーカイブし、プロセスで見られる対話の形を探る。</p> <p>【目的】 北海道大学に1973年に建てられた温室は、施設の老朽化や研究の変化によって使用されなくなった。大学の古い施設を、アートと学問が交わる場所にしたい。2020年から「アノオンシツ」と名付け展示を進めてきている。コロナ禍における「時空間の体験」を、多様な時間軸を持つ要素を入れた展示を複数回開催することで、新たな科学技術コミュニケーションの場づくりとして探ることを目指す。</p> <p>【実施体制】 北海道大学 CoSTEP ソーシャルデザイン実習の担当教員である朴が、主体的に活動を進める。その活動に、研究林や研究畑、研究用の果汁園や研究牧場を所有する北海道大学 北方生物圏フィールド科学センターの協力を得て、北海道の作家と植物についての作品を制作し、展示し、そのプロセスを分析する。</p> <p>【実施方法】 北海道在住の陶芸作家安部郁乃さんや、木工作家高野夕輝さんと、それぞれ共同制作を行い、展示を実施した。その際に、北海道大学 研究林の協力のもと、研究者にリサーチをしながら進めた。そのほか、札幌の空間デザイナーやギャラリーと連携して展示を制作し、一般公開でインスタレーションを行った。</p> <p>【成果と社会的効果】 教育> アートを通じた新たな科学技術コミュニケーションの実践活動を通して、社会への問いかけとしてのアート空間づくりの学習 研究> 大学の知識や環境を学外とどう繋げて広げるかに対する実践研究の提示 社会> コロナ禍における時空間の体験、市民が大学を活用できる新しい方法への提案、多様な視点でテーマを探る体験</p>		
共同研究者等の有無	なし・あり(人数 3名) ※共同の研究者等の氏名(学年・現職等)記入 研究者: 奥本素子(北海道大学 CoSTEP 准教授) 作家: 安部郁乃(陶芸作家)、高野夕輝(木工作家)		
助成金額	40 万円	主な使途 作品制作 / 設営	
本研究に関する他の助成金受給の有無	なし・あり ※助成先を記入 対象となる実践の種類は異なるが、「アノオンシツ」プロジェクトに関する実践活動は、以下の助成を受けて進めている。 ・2021年度 KNIT共同研究助成 ・2021年度 基盤研究(C) 21K02940 アートを用いたSTEAM教育での学習者間認識調査		

研究室名 学会・博物館名	北海道大学 CoSTEP ソーシャルデザイン実習
テーマ	アノオンシツのディスプレイを通じた新たな科学技術コミュニケーションの場づくり

【目的】

北海道大学に1973年に建てられた温室は、施設の老朽化や研究の変化によって使用されなくなった。大学の古い施設を、アートと学問が交わる場所にしたいと、2020年から「アノオンシツ」と名付け展示を進めてきている。コロナ禍における「時空間の体験」を、多様な時間軸を持つ要素を入れた展示を複数回開催することで、新たな科学技術コミュニケーションの場づくりとして探ることを目指す。

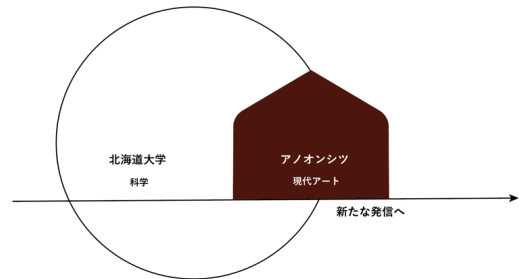
● 因学の研究空間を、今らしい発信の場にするためには？

大学で研究されている科学と、学外のクリエイターが同じテーマについて考え、作品制作をしていくことを通して、古い研究空間である温室をフィールドに新たな体験を提示できることを目指す。

● 自然の見方を提示する方法は？

自然、その中でも植物を軸に、自然と人間との共存を考えられる実践を行い、SDGsの取り組みや社会問題と関連づけて考えられる場をつくる。

● コロナ禍における、「新たな体験」を空間でどう提示するか？



【実施体制】

北海道大学 CoSTEP ソーシャルデザイン実習を担当する教員朴が、主体的に活動を進めた北大 北方生物圏フィールド科学センターの協力を得て、共同制作/展示を実施する。

● ソーシャルデザイン実習

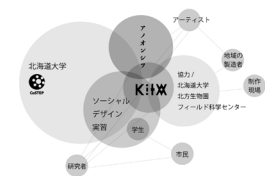
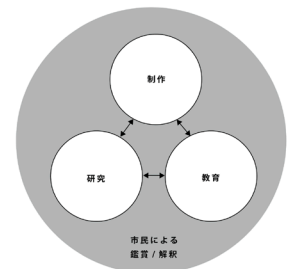
CoSTEPは1年間の科学技術コミュニケーターを養成する教育/研究プログラムであり、その中に設置されているソーシャルデザイン実習は、社会から科学技術と社会との関係を考えることを目的に、実際に社会における課題解決を科学技術コミュニケーションの観点から実装することを目指している。

● KitA、アーティストと科学者がともにつくる空間

CoSTEPでは、2018年からアーティストの滞在制作プログラムKitA（キタ、Kagaku into Art）を運営してきている。アノオンシツを軸に、自然をテーマ/材料にした作品を制作し、ディスプレイをすることで作品の鑑賞や解釈の仕方に対する実験ができるようになる。

● 研究の場としての自然を、発信する

北大 北方生物圏 フィールド科学センターは、7つの研究林を含め、合計16の施設・フィールドがあり、研究の場として活用している部署である。研究の場としての自然を、アート作品制作や発信の場として新たに位置付けることで、自然と付き合う多様な見方が提示できると考える。



【実施方法】

北海道大学 札幌キャンパスにある古い温室を生かしたアートプロジェクト「アノオンシツ」をフィールドに、2回展示を実施した。

● アノオンシツならではのディスプレイの実験

実験温室として使っていた空間を、植物がいる空間からそれぞれ異なる世界観が広がる展示空間に変えてみることで、温室が持つ空間の力や、今まで発見できなかった空間の魅力と使い方を見つけられる体験を目指した。2回の展示では、鑑賞者の目線、作品の置き方、映像/ライトの使い方を反転させるように工夫した。また、温室の特徴上周りの展示空間を試みた。

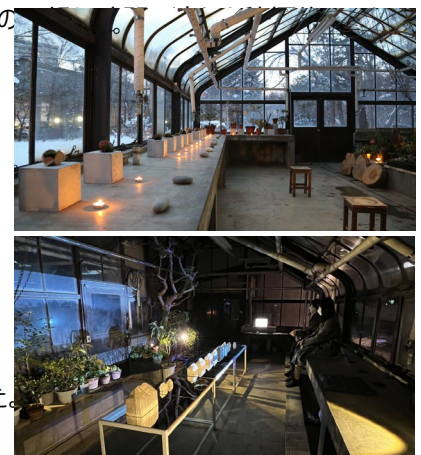
● 実践

・植物と居場所 vol.1 苔の息

2021年12月10、11、12、17、18、19日の6日間、陶芸作家の安部郁乃さんと、朴炫貞が共同制作したインスタレーションを行った。温室に元々あったコンクリートの台を用いて作品を配置し、音と蠟燭で息を感じられるような空間にした。（写真上）

・展示「山々と」

2022年3月18、19、20、21、4日間、木工作家の高野夕輝さんと朴炫貞が共同制作したインスタレーションを行った。鏡を敷いて、映像を照明として用いて、戦争に反対するメッセージとして線引きをテーマにし、線で区切られるように作品を配置した。（写真下）詳細は <http://anogreenhouse.com/>



研究室名 学会・博物館名	北海道大学 CoSTEP ソーシャルデザイン実習
テーマ	アノオンシツのディスプレイを通した新たな科学技術コミュニケーションの場づくり

【研究・教育普及活動の成果】

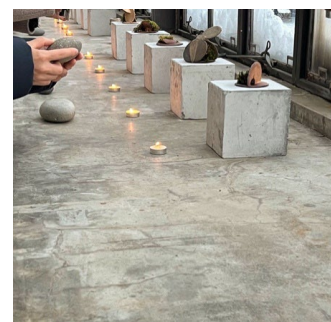
【教育普及】

- ・科学技術コミュニケーターを目指す多様なバックグラウンドを持つ学生に、アートを通した新たな科学技術コミュニケーションの実践活動を通して、社会への問いかけとしてのアート空間づくりの学習の場を提供できた。
- ・一般市民に開けた展示を用いることで、学生に対する教育から、地元住民が学べる/考える展示空間としての位置付けになった。主体的に空間を運用し、解釈できるようになり、対話やアートを軸にした企画に適した空間構成について提示でき、新しい科学技術コミュニケーションの場づくりを体験できるようにした。
- ・北海道をフィールドに作品活動している作家と、それぞれアノオンシツでの展示を目指して作品を共同で制作していくことで、場の特徴だけでなく、苔の解釈や木材に対する解釈をそれぞれ広げることができ、アノオンシツでしかできない表現ができたことは、目指したことが達成できた成果だと考える。

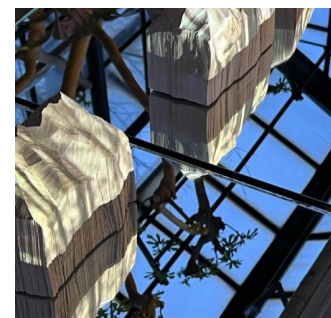
《植物と居場所 vol.1 苔の息》韓国語で苔を「イキ」ということから着想し、苔の居場所を陶器で制作し、苔の息することを感じられるように蝋燭を配置して石の形をした音のする陶器作品をセットにした。その13セット用いてインスタレーションをした。

朴が進めている韓国語と日本語をつなげた物語の制作の元に、共同制作した安部郁乃さんが考えていた砂漠のバラのイメージから続いた苔、土、石、とつながる循環を3つのオブジェを繋げて考えられるようにし、自然を移して楽しんでいることを改めて考える空間を目指した。

観客は台に並んで作品を鑑賞していく形にし、昼と夜、晴れと吹雪の日で大きく変化した展示を楽しめるようにした。



《展示「山々と」》木工作家の高野夕輝さんに、アノオンシツの周辺で伐採せざるをえなかったイチョウやハルニレ、アカナラなどのディスクを用いて、北海道の山をイメージした山の作品を頼んだ。出来上がった山の作品は、木のフシや割れ目、不思議な模様、木材の繊維などがそのまま見えて森を構成する木々の生きた痕跡が見えるようになっていた。その山々は鏡を敷いてアノオンシツの真ん中に配置し、台の上に座って見下ろす形にすることで、山々を眺める体験ができるようにした。山を韓国でも「サン」ということから、山々と書いてサンサンと読むようにし、燦々と降り注ぐ光として苫小牧と天塩でリサーチしながら撮影した森の映像を配置した。また、戦争に反対するメッセージとして線引きをテーマにし、線で区切られるように作品を配置した。



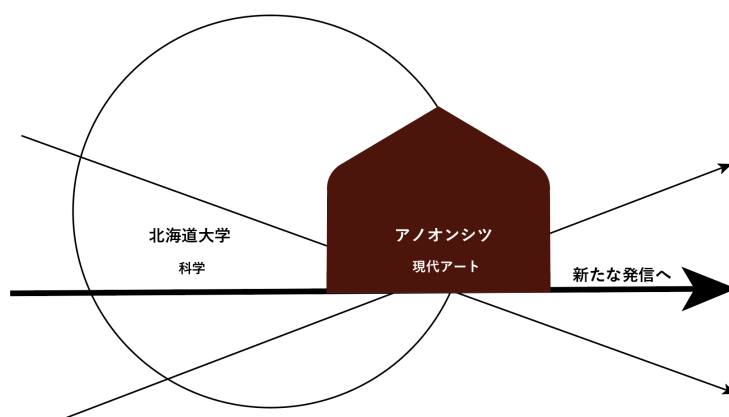
【研究】

- ・アートを用いた科学技術コミュニケーションの実践研究が体験できる場を提示できた。科学との関わり方について（特に自然に関して）、鑑賞者がそれぞれ自分の体験と結びつけて考えられた経験は、今後類似する体験があった時、当事者意識を持ってテーマについて考えることにつながる。
- ・北海道のローカルな文脈を強く持つ高等教育機関において、社会と繋がっているアートプロジェクトを実践/提示することで、アートプロジェクトの新しい在り方や、アートとのつながり方について探ることができた。北海道の土や木材を使って北海道を描く2回の展示で、北海道独自のローカルの文脈が軸になったが、鑑賞者は展示で地球の気候危機、人間が自然を使っていく営みなど、広いテーマについて考えるようになっていた。主体的に物事を考える時に、地域の歴史や自然をしっかり踏まえ、そこから社会問題につなげることが、アートを通した科学技術コミュニケーションの強くであることがわかった。
- ・アノオンシツという特定の場所で美術の言語を用いてメッセージを発信することで、現代アートについて詳しくなく、もしくは苦手意識を持っている観客であっても、なんとなく体験することでアートにも科学にも興味を持てる入口の役割をするようになった。さらに、小規模の展示会場ならでの対話を通して、それぞれの問題意識について話し合うことで、作家側にも鑑賞者側にも気づきがあったことが、実践の成果だと考える。

研究室名 学会・博物館名	北海道大学 CoSTEP ソーシャルデザイン実習
テーマ	アノオンシツのディスプレイを通した新たな科学技術コミュニケーションの場づくり

【今後の成果の活用と活動の展開について】

アノオンシツプロジェクトは、大学の研究の歴史や、自然の流れにおいてみられる気候危機を含めた変化、科学者とクリエイターの共同作業、大学の新たな活用の仕方/研究のアウトリーチの仕方を試す場として始まった。特に2021年度には、大学の中と外をつなげる活動として、展示を企画/実践し、共同制作に関する可能性を感じると同時に、多様な方向性が見える実践になったと考



今後継続的に、より多様な方法で、大学と活発に連携し、実践を重ねていくことで、社会に貢献する

○ 科学者との共同制作

今回の実践研究で進めた2回の共同制作/展示では、科学者にリサーチする形でコラボを図ったが、今後より深い関わりを持って共同制作できる可能性が見えたことは成果としてあげられる。より深い関わりや、科学者とクリエイターそれぞれの視点を同時に提示する形での共同制作を企画し、進めていきたい。

○ 新たな研究アウトリーチ

アノオンシツプロジェクトを共催で進めている北方生物圏フィールド科学センターが管理する施設は、研究林から臨海実験所、果汁園や牧場までさまざまである。また、大学が研究のために培ってきた資料は、クリエイターにとってはまた新たな表現の材料になり、新たな表現によって研究者の良い刺激につながる。大学が持つ物的/人的資源を、アートを軸に進めていく企画を、今後も続けていきたいと考えている。

○ アーカイブ作業

アノオンシツはさまざまな分野に対して、多様な手法を用いて進められることがプロジェクトの魅力だと考えている。今まで進めてきたプロジェクトをウェブを中心に、より充実したアーカイブ作業を現在進めている（2022年度中に公開予定）。今までどのような活動をしてきたかをテキスト/写真/映像などで蓄積することで、アノオンシツのアイデンティティーを定めていきたい。

○ 市民に向けた大学の場

2021年度の活動でも改めて感じられたことは、大学に対する市民のニーズが広くなりつつあることだった。地理的にも、歴史的にも、規模的にも札幌の中心にある大学には、観光から日常の中の自然、学びの場所として、より親しみを持って関わるニーズが強くなっていると感じた。それは生涯学習や、オンライン化でさまざまな情報にアクセスしやすい環境も、理由の一つだと判断する。その中で、物理的なアノオンシツ空間を軸に、オンライン・オフラインで市民に開かれた大学の場づくりをしていくことは、現代アートの文脈が際立ってない北海道大学における新たな実践になると考える。展示以外でも、ワークショップやツアー、教育と絡めたコンテンツ作りなど、多様な形で実践を進める予定である。